

悪魔の



1039

講談社現代新書

話



池内紀

現われる時間は夜、好きな色は黒。人に禍わざわいいと死をもたらし、宇宙をも破壊しつくすすさまじい力……。

世界の半分を支配する闇の帝王たちが物語るものはなにか？

その誕生から性格、分類、材質まで、「悪魔」の観念が生みだした華麗な精神絵巻をよむ。

悪魔の話

一九九一年二月二〇日第一刷発行

著者——池内 紀 ©Osamu Ikeuchi 1991



発行者——野間佐和子 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二—二二 郵便番号二二—〇一 電話〇三—三九四五—二二—

装幀者——杉浦康平＋赤崎正一

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

ISBN4-06-149039-7 Printed in Japan (定価はカバーに表示してあります)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

悪魔の話

目次

1 — サタン紳士録

夕方、ひとけない通りで……現代の悪魔紳士……異種合体のうす気味悪さ……悪魔のシンボルとしてのヘビ……醜惡な悪魔像……前身は天使……いま、悪魔は

8

2 — 悪魔学入門

世にも恐ろしい絵……悪魔とは何か……闇を選ぶか、光を選ぶか……一元説と二元説……神はなぜ悪魔を創造したか……悪魔の分類……悪魔の名前……契約は二十年

24

3 闇の力

44

悪魔との記者会見……総数十一兆?……悪魔の材質とは……
『神曲』天国篇……天使語と悪魔語

4 黒と白

60

黒ずくめの男……黒のもつイメージ……白というフィクション
……ボードレールと黒……威厳あふれた黒……紙切れの眩惑

5 飛行幻想 魔女狩り 1

79

ドイツの小さな町で……魔女の乗り物……「魔男」はいない?
……魔女の香油……ワルプルギスの夜……理性が眠る時

6 小さな町 魔女狩り 2

95

魔女狩り市長……魔女という罪の発明……テンブル騎士団の「犯罪」……無から有は生じない……ヘンゼル・グレーテル神話……グリム童話の中のファシズム……テレビと魔女狩り

7 — ファウスト博士

113

黒魔術師ファウスト……黄金をつくってほしい……もつとも完璧な錬金術師……悪魔がもち出した条件……二十四年契約……契約か賭か……悪魔の黒い魔術

8 — 不思議博物館

128

謎めいた国王、ルドルフ二世……悪魔とまじわる皇帝……国王のひそかな楽しみ……悪魔と論争したルター……教会の中にも悪魔がいる……悪魔の家

9 流刑の神々

144

神々の悪魔化……かくれ家に住む神……追われた神、河童……
ハイネと柳田国男……神々の衰頹

10 気の悪い悪魔たち

158

影をなくした男……悪魔の足あと……橋造りが得意……悪魔も
ヘマをする……大建造物は神への挑戦……恩知らずは人間の方
……悪魔も驚く珍品

11 魔除け

173

愛の霊薬……マンドラゴラの根かワニの脳髓か……媚薬を飲ま
せる方法……ゴーレムとオドラデク……ジャンボ機操縦席のお
札……さまざまな悪魔祓い

12 — いたるところに悪魔がいる —

最後の審判……禁止された闇の王たちの肖像……グリユーネヴ
アルトの見た闇……ボスの奇怪な世界……ゴヤの辛辣な目……
ゴヤの悪夢の世界……ゴーゴリとロシアの悪霊たち

189

あとがき

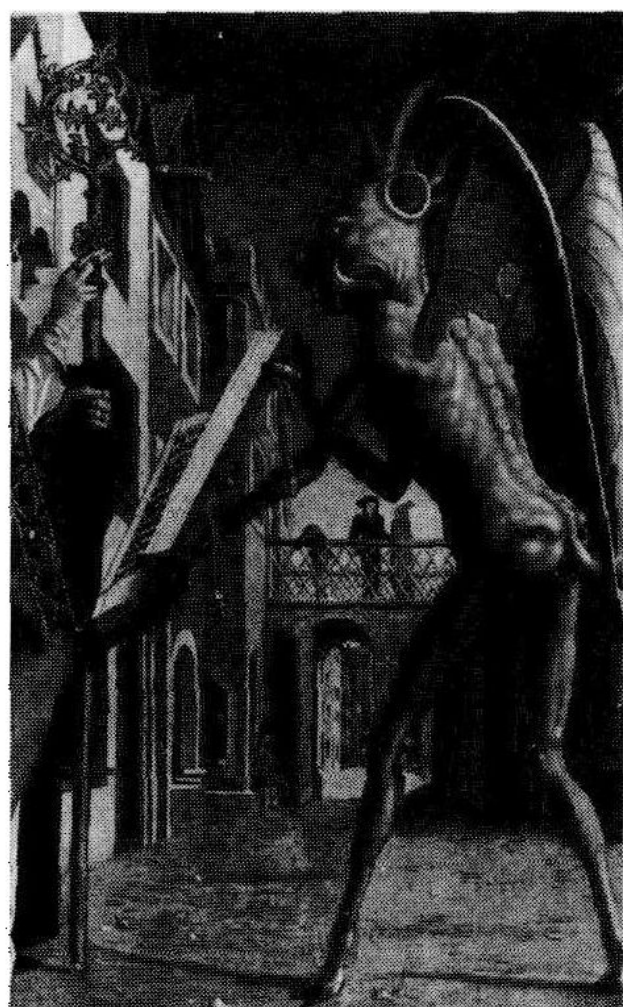
204

1—サタン紳士録

夕方、ひとけない通りで

昭和十五年（一九四〇年）一月、東京の下町にデマが流れた。赤マントをつけた人さらいが出没して子どもをさらっていく。少女に暴行して殺すというのだ。

デマは口づたえに伝えられ、たちまち東京中にひろがった。やがて横浜から西に移り、大阪にまで達したらしい。子どもも親もふるえあがった。学校の往き帰りに親たちが代わりあって護衛をする。広場や辻で遊ぶ子どもの姿がパツタリ消えた。夕方、ひとけない通りにさしかかると足がすくんだ。目をつむるようにして駆け抜ける。おりしも女子トイレ



異種合体した悪魔の姿。15世紀の祭壇画

をのぞいていたあやしい人物が逮捕された。もつとも、それは赤マントではなく黒いボロ服の男だったのだけけれど。

世にいう「赤マント事件」である。加太こうじの『紙芝居昭和史』によると、デマのおかげでその夏、大阪の警察に紙芝居の「赤マント」が押収されて焼却のうきめをみた。今後、このような紙芝居を作るなど注意されたという。それというのも東京の谷中墓地に近いあたりで少女が暴行されて殺される事件があった。そのとき、近所で加太こうじ作の紙芝居をやっていた。赤マントの魔法使いが靴磨きの少年をさらっていつて魔法使いの弟子にするというストーリー。もともとは芥川龍之介の『杜子春』^{とししゅん}を換骨奪胎^{かんこつだつたい}したもので、いたってまじめな、教育的な作品だった。『杜子春』に出てくる仙人が赤マント、杜子春が貧しい靴磨きの少年というわけである。その魔法使いが赤マントを着ていることが、現実の少女暴行事件と結びついてデマの発生になったらしい。

「紙芝居の絵は東京で使うと横浜から東海道の主要都市を経て大阪へいく。その絵が移動する順路と時間が、赤マントの人さらいのデマが流布する順路と時間にうまく一致していた」

それでてつきり、この紙芝居がデマの張本人とされたらしい。

現代の悪魔紳士

残された紙芝居の絵によると、赤マントはなかなかの紳士である。シルクハットに蝶ネクタイ、黒い燕尾服にタテ縞のズボンといういでたち。鼻ひげをはやし、すらりとした長身で、手に細身のステッキをもっている。肩につけた赤マントは空を飛ぶ道具ともなった。絵の一枚では、マントが魔法の絨毯じゅうたんのように少年をのせて大都会の上空を飛んでいく。少年のかたわらにシルクハットの紳士がステッキをかざしてさっそうと立っている。

どこかで見たことのある姿ではなかろうか。戦前の伊達男たちだておとこ——何よりも江戸川乱歩の『怪人二十面相』でおなじみだろう。それはときには「青銅の魔人」であつたり、「夜光人間」であつたり、「透明人間」だつたりもした。自由自在に姿を変え、念入りにも当の宿敵明智小五郎に化けたこともある。魔人、怪人、妖怪博士と、さまざまに変身したが、たえず立ち返ったのは、シルクハットにステッキの優雅な紳士である。

加太こうじによると、赤マントのデマは、おりから拡大の一途をたどり、いつ終るかわからない日中戦争のために、子どもの世界にすら不安感が生じたことと、さらには忠君愛国を口癖にした息苦しい世相のなかで、子どもたちが「エロ・グロなどの強い刺激に抑圧された気持の捌け口はけ」を見出したためだという。

そうにちがいない。とともにもう一つ、少年たちはシルクハットと黒い燕尾服の、絵に



紙芝居「赤マント」

かいたような紳士のなかに、ひそかな悪の原像といったものを敏感に感じとっていたのはあるまいか。時代に合わせて洗練され、おそろしく現代化した悪魔紳士である。世の紳士録にピッタリの姿をとったサタンの末裔^{まっさい}。

あきらかに赤マントや怪人二十面相には、おなじみのアルセーヌ・ルパン物をはじめとする神出鬼没のヨーロッパ産怪人たちのお手本があった。さらにそのお手本をたどるとき、中世のグロテスクな肖像から、ものの見事に変貌をとげた、いとも優雅な悪魔像にいきつく。

異種合体のうす気味悪さ

中世ヨーロッパの人々が、どんなふうに悪魔を思いえがいたか、同時代の図像が克明に示している。そこでは悪魔は、あくまでもおぞましく醜悪である。鳥や魚やカメレオンの頭をもち、胴はヘビ、背中にコーモリの翼といったのがおなじみの姿。足には爪がはえている。あるいはひづめ状に割れている。全身にワニのうろこをもつものもいれば、大アリクイのような尻尾のあるものもいる。十五世紀ドイツの画家ミヒヤエル・パッハーの祭壇画には、聖ヴォルフガングの威光に圧倒されて、心ならずも黙示録をひらく羽目におちいった悪魔が描かれているが、角のある頭や、カメレオンのような胴や、コーモリの羽根や足の

ひづめといったお定まりの姿に加え、「上にあるものは下にあるものの如し」の聖なる文句を嘲弄^{ちやうろう}するかのよう、画家は悪魔の尻に目鼻をつけ、股間には恥部のようにタテに裂けた、まっ赤な唇を描きこんだ。

あるいはほぼ同じころのマルティン・ショーンガウアー作「聖アントニウスの誘惑」では、タツノオトシゴのようなのや、サメに似たのや、角をはやして鬼のようなものなど、さまざまな悪魔たちが聖人を惑わすために髪やひげをひっぱり合っている。夜な夜なあらわれるこの手の悪霊に、どうやら聖人は慣れっこになっているらしく、ひげをひっぱられ、髪をむしられても、少々うんざりした顔で、なすがままにされている。

悪魔のおぞましき、罪深さを表現する際の定式めいた一つの手法が見てとれる。魚と獣、鳥と爬虫類といったふうに、類や種のちがう生きものを強引に合体させるのだ。ジャンルのちがった生物の部分を取り、組み合わせ、奇妙な雑種として世に送り出す。部分が独立して、異質のもの同士が合わさるとき、人はなぜかうす気味悪さを感じる。生のルールが蹂躪^{じゆうりん}されたように思い、そこに罪深さを覚え、おぞましきに立ちすくみながら、そのくせ怖いもの見たさの好奇心をもかきたてられる。

悪魔史の永い歳月のなかで、グロテスクに肥大した想像力がはぐくんだ産物である。その以前は、むろんもっと素朴に表現されていた。ロマネスクやゴシックの教会を飾る聖人

たちには、あいだにはさまつてさまざまなデーモンがいる。悪の化身を示すためには当然何らかの比喻によつた。わかりやすくいうために、ごく日常的な生きものに託して語られた。使徒マルコのいうところによると、ブタのひづめに悪魔がいる。『マルコ伝』にいわく、『彼処^{かしこ}の山辺に豚の大なる群、食しゐたり。悪鬼どもイエスに求めて言ふ、『われらを遣^{つか}して豚に入らしめ給へ』。イエス許したまふ。穢^{けが}れし霊いでて、豚に入りたれば、二千匹ばかりの群、海に向ひて、崖を駆けくだり……」

聖書にこうあるばかりに、あのおいしい肉のかたまりが悪魔の代用につかわれた。古い悪魔学のいうところによると、ブタの前足には悪魔が入りこむときの入口にした小さな穴があり、毛をかきわけてしらべるとたしかにそれが見えるという。

悪魔のシンボルとしてのヘビ

とりわけ古典的な生きものはヘビである。こともあろうに『創世記』の冒頭にちかいたころで語られている。ヘビはエホバの造つた野の生きもののなかで「最も狡猾^{さか}し」。これがイヴをそそのかした。樂園の中央にある木の実を食べると死ぬといわれているが、まづ赤ないつわり。死んだりしない。それどころか、あの実を食べると目がひらいて、みずから神のようになり善悪を知るにいたる。女は知恵の実に目がないものだ。さつそくそれをと

って食べ、夫にも与えた――

人類の樂園追放をひきおこしたそもそもの元兇げんきようである。現実のヘビのなかには毒ヘビという凶暴なやつもいるし、姿かたちが多少とも気味悪い。当然のことながら、古来、悪魔のシンボルとされてきた。

竜といった想像上の生きものは「空を飛ぶヘビ」、地上のヘビのへ進化したものとされている。死と闇の王である。大天使ミカエルは竜と闘う。闇を打ちまかす太陽神の役割だろう。イングランドの守護聖人であるジョージ上人をはじめ、ヨーロッパのあちこちに竜退治の説話がある。ついでながら川は蛇のように蛇行する。その河川がしばしば氾濫はんらんをおこした。竜退治はまた治水行事の比喻でもある。

「最も狡猾し」生きものは悪の化身にとどまらない。これはまた知恵の比喻としても使われてきた。ヘビはさらに何度も脱皮する。よみがえりの喩たとえにも最適だ。カルタゴ生まれの神学者テルトゥリアヌスによると魔王（サタン）や反逆天使（ルシファー）は「悪しきヘビ」であり、一方キリストは「善きヘビ」である。十字架に巻きついたヘビといった図像があるが、生命の木であって、よみがえったキリストを表わしている。そんな特性の民間版というものだろう。中世から近代にかけてヨーロッパでもっとも恐れられたペストにヘビが「きく」という迷信があった。風俗画によると、ずっと下った十九世紀ロンドンの歳いちの市に